

戦争を知らない世代へ ⑭ 和歌山編

炎と叫喚の記録

— 和歌山市空襲 —

戦争を知らない子供たち



戦争を知らない子供たち

戦争を知らない子供たち

戦争を知らない世代へ⑭

炎と叫喚の記録——和歌山市空襲

昭和50年 8 月15日 初版第 1 刷発行

編 者 創価学会青年部反戦出版委員会

発行者 山崎 善智

発行所 株式会社 第三文明社

郵便番号 101 東京都千代田区猿樂町2-5-4

印刷所 凸版印刷株式会社

発刊の辞

戦争反対を叫ぶのは易しいが、人々の共感を得ることは難かしい——現在平和運動は多くの場合、私達庶民感情と遊離し、イデオロギー論争の場と化している。『反戦・平和』の叫びを空虚なものにしてきた、といえるだろう。

このときに、庶民の空襲体験を一冊の本として、この和歌山の地において刊行できたことは、私の最大の喜びである。

題名も「炎と叫喚の記録」と、まさに三十年前、焦土と化したわが郷土の空襲がありありと想い浮かぶようである。この書には戦争に対する怒りはもとより、平和を願う庶民の感情が一つ一つの手記ににじみでている。私はこの書が、人々の生命に浸み込んでいくような平和運動を推進しゆく烽火ともなっていくことを心より切望するものである。

特に、戦後世代の人達に、平和の砦を心に築くうえから一読をおすすめしたい。そしてさらに平和戦線の拡大へと連なっていくことを期待している。

最後に反戦出版委員会のメンバーの労を心から感謝したいと思う。

昭和五十年八月

創価学会青年部

和歌山市男子部長

川本勝次

目次

発刊の辞 1

I “悪夢”の三時間

鬼畜となつてわが子を焼く.....	田辺貞雄	10
戦後三十年、まだ子供達の声が.....	保田たつ	15
娘よ、息子よ「なぜ返事をしないの」.....	井野はな	18
癒えた悲しみに追い討ち.....	柏木静一	22
叫喚の一夜、四人の家族を失う.....	西村貞子	25
九人の家族が半分に.....	湯川圭子	30
早く息を引きとつて.....	吉田志津子	35
しのびよる死に笑つた父.....	菊田信子	39
壕を貫いた焼夷弾が祖父に.....	沖 梅子	42
人体解剖図のような私.....	九鬼由起子	45
無駄にはしまい、この体験を.....	高瀬保夫	48
私は十日間、眠り続けた.....	滝 光三	53
やはり、あれが母だった.....	数見正子	57

焦土から平和を祈る……………	岡本啓子	60
語らずとも「体が語る」……………	三目源七	63
植木が私を追いかける……………	松下シゲ子	68
女手ひとつで育てた娘を……………	光吉玉枝	72
わが子よ、熱かったろうに……………	中谷豊子	76
強風で危うく左足切断……………	脇田寅楠	80
つきまとう顔の火傷……………	又尾クスコ	83
不運な長男の死……………	田中秀子	86
婦人救護班として……………	御木糸枝	89
帰省した兄の心痛は書けない……………	中谷貞子	93
兄夫婦たちは今どこに……………	福田富子	97
三日間、夫を捜し続けた私……………	奥野種子	101
焼け出されて嫌われて……………	垣内のぶ子	104
防空頭巾に託す反戦の願い……………	山崎富美子	108
この記憶をとどめたり……………	安野谷花子	111
この惨状を若い人に伝えたい……………	久保時弘	114

忘れ難い『二つの空襲』……………松尾久美子
 三時間の悲惨、忘れまい……………岡崎富美子
 短夜やあまりに悲しき大嵐……………多田平次郎

Ⅱ 私が見た空襲

地上四十メートルで目撃……………坂田耕治
 七割が破壊された和歌山市駅……………中山記一郎
 警報下で気象観測……………野際義雄
 幼な心に刻まれた恐怖……………浜田吉男
 炎の中を逃げ回って……………堂上 魏
 「七月九日を語り継ぐ」……………安田喜代美
 「私達は助かったのだ」……………井口タマ
 あの老婆の気持が今わかる……………太田ひろえ
 民間の救護部長として……………新家正夫
 その夜『一つの生命』が誕生……………増田 茂
 「婦長さん、僕らを放って逃げて」……………飯村キミヨ

外科医の献身……………	三好晴之
教育者の信念貫く……………	辻 幸三
負傷者を収容した旅館……………	和中幸雄
万葉の地に空襲の爪跡……………	北畑良三郎
旧県庁跡の惨状……………	市川まさ子
M百貨店付近の惨状……………	岡崎せつ
商工会議所で見た地獄絵図……………	小浪徳松
二百人の従業員が十三人に……………	岡本正三
旋風……………	藤田喜多次
汀公園の遺体処理……………	松岡栄一
わが家の空襲前後……………	堀口治子
罹災者の生活……………	西村貞一
「衣」「食」を奪われて……………	北島フミ
緊迫した食糧事情……………	玉置久夫
“悪夢”の記憶……………	滝本順一
二十日後の市議会……………	中西光之助

第一章 “悪夢” の三時間

鬼畜となってわが子を焼く



田辺貞雄（67歳）

恐いとも、痛いとも、苦しいとも何も言わずジッと唇をかみしめて耐えぬこうとしているわが子——その焼けただれた姿を、私はただ傍観するのみであった。

待つこと久し、やっと金岡陸軍病院から駆けつけてくれた軍医が、黙々としてリンゲルなど二、三本の注射をうった。しかし、反応がない。——人体の三分の一に火傷を負ったときは、人間はほとんど絶望だと知っていた。町内の救護班長をしていた私の生かじりの知識ながら、わが子に死の宣告を与えるほかなかった。

次々と類死の重傷者が運ばれてくる。

絶命するもの——。

断末魔の呻き声を発するもの——。

狂い回るもの——。

病院内は混乱のるつぼと化し、昨夜米の焦熱地獄の中、阿鼻叫喚がなお絶えずに狂乱の頂上に

達した。やがて、収容力の乏しいここでは「死者はただちに引き取れ」との要求が出された。しかし、今後の処置をどうするか。わが家は丸焼けに相違ない——私は思案した。

わずかに焼け残ったこの病院（現中央保健所）から、友田町を南に出て、電車道（当時、公園前に通じる電車があった）へ出てみた。

東和歌山駅から南海市駅までは、斜め直線に見渡す限り、焼けただれた建物の残骸と、路傍は瓦礫と灰のみの惨たんたる光景であった。

先年、毎日新聞募集の五十万和歌山市論の懸賞論文（私が一位当選）の構想は、哀れ一夜にして米機の蹂りんにより廃虚の街となり果て、財産家も、貧乏人も、すべて平等に裸一貫にされ、焼け跡に放り出されたのである。

転々と横たわる焼死体——。

すでに、木炭のようになって男女の別さえつかぬもの——。

蒸し焼きにされたのか、形容し難い蠟色に変色したもの。

直撃弾をうけ、骨と肉片らしき物がいたところに飛散していた。

眼を覆う惨状である。でも、虚脱状態となった被災者は、誰一人として泣いてはいなかった。すでに、泣く気力と、涙さえも出ない状態であったのだ。

途中、ようやく形骸をとどめるリヤカーを拾って、抱きかかえたわが子の遺体に乗せて、行く

当てもなく火の海をさまよいつづけた。照りつける七月の猛暑と、なお、あちこちに余燼がくすぶり、その熱気のためドカ靴は燃え出す始末。

その後、妻の弟（当時、阪大工学部学生）に偶然めぐり会った。義弟は私に「老母の行方が知れない」「四歳の長女は妻が背負っていて怪我ひとつない」と語った。しかし、私はなんの感動も示さなかった。放心状態であったのだ。やっと義弟と相談の結果、一応、わが家の跡を見に戻ることにした。——そこで妻と長女らにおちあえるだろう、その結論を見い出すと、微かに生気が湧いた。

昭和二十年七月九日深夜——。

空襲警報とともに、防空頭巾をかぶるなど身づくろいを整え、「いざ、敵機来たれ」と自からを励まし、バケツを持ち出し、救護用靴を肩にかけたまでは、いつもの訓練通りであった。「今夜もどこかへほこ先を転じるだろう」と安易な気持ちでいた。ところが爆音とともに、市の周辺は俄然真昼のような明るさになった。照明弾を投ぜられたのだ。攻撃目標を確認したB 29からは、耳をつんざくばかりの轟音と、焼夷弾が雨霞の如く落下し夜空をみるみる真紅に焦がしていった。筆舌に尽くせぬ戦慄と、恐怖と、興奮で私は鳥肌がたった。

親の名を呼ぶもの——。

妻や子を求めながら必死で逃げ惑うもの――。

B 29 は、これらの人の波に飽くことなき執拗な攻撃を加えてきた。火焰の激しさは、消防用ポンプの五台や十台ではとても追いつかない激しさであった。油脂性の布片が、メラメラと燃えながら乱舞するのだから、木造家屋はひとたまりもなく炎にのみ込まれていった。『もう駄目だ！』私は、早く家族を屋外へ逃がさねばならぬと思い、妻に長女を頼み、長男の手を引っ張って街路へ出た。『しまった！』街路へ出たその瞬間であった。この焼夷弾を浴びてしまったのである。

子供の衣類は燃え上がった。私は、とっさに子供を抱きかかえ、傍の水槽へ突っ込んだ。

火は消えた――。

逃げ場に迷ったあげく強制疎開で空地となっていてるところへ走り込んだ。既に、そこには十数人が集まっていた。バケツを頭にかぶり、火傷を負った子供を見守った。眼前には、なおしきりに火焰が飛んでくる。

『ああ、ついに一億玉碎のときがきた！』と私は観念した。毎日、見馴れた鷺ノ森別院の本堂も焼け落ちた。最後に天守閣が火柱を立てて燃え崩れるのを見上げたのであった。

明けて十日の夕暮れ――。

わが家の焼け跡で、生き残った家族とおちあえた。が、死児の亡き骸をどう始末するかで途方にくれてしまった。ふと気がついてみると、昨夜来、水一滴飲んでいない。誰も口に出さないが

等しく空腹を感じていた。それに、今夜眠るところさえないのであった。「どこかに焼け残った小屋があるかもしれない」「ともかく歩こう」と、思案一決した。

そこでまず、わが子の遺体をこの手で茶毘に付してやろう、ということになり、本町六丁目辺りで、残り火をかき立て遺体を焼いた。

妻が「ワアッ」と初めて泣き崩れた。鬼のような心になって、わが子を焼く父の姿こそ悲惨であつた――。

成仏してくれノ

戦禍の犠牲だノ

――時に八歳。始成国民学校二年生であつた。

数日後、再び同所を訪れ、一枚の封筒に遺骨をおさめた。老母ひとり消息不明のままとなつた。戦後、こうした戦災者を糾合して団体をつくり、政府に線香代でも要請する、とか聞いたが、当局からはなんら福音は伝えられなかった。また、それは団体とか政党が利用するための手段に過ぎないものであつた。せめて、この拙文を捧げて、三十年前、尊い生命を失った幾多の霊を慰めたい。